



写真-1 新書写橋から上流を撮影（令和6年4月）

■ 延々と続く桜つつみ回廊

写真-1 は、令和 6（2024）年 4 月上旬に新書写橋から夢前川兩岸の桜並木を撮影したものです。この年は、桜の開花が例年より 1 週間ほど遅く、5 日前に来たときはまだ三分から五分咲きでしたが、この日は天気予報も快晴ということで、満開の桜の写真が撮れると思って来ました。予報どおり雲一つない晴天でしたが、前夜の雨と風で満開だった桜が少し散ったようです。それでもまだ十分楽しめますが、平日の午前中ということもあって、花見客はまばらでした。

平成 27（2015）年に来たときは、写真-4 のように大勢の花見客がブルーシートを広げて花見を楽しんでいました。

姫路界隈では姫路城の桜が有名ですが、夢前川沿いに延々と続く桜並木もなかなかのものです。昭和 35（1960）年に始まった姫路市による夢前川整備事業において、堤防に多数のソメイヨシノが植樹されています。

筆者も、この日天気がよかったので姫新線付近から山陽本線の下流に架かる京見橋までの夢前川堤防を約 5km（往復約 10km）、桜を見ながら歩きましたが、所々途切れる区間はあるものの、兩岸に植えられた桜の回廊は圧巻でした。



写真-2 姫路バイパスの上流左岸の桜
（令和6年）



写真-3 姫新線下流右岸の桜
（令和6年）



写真-4 新書写橋上流右岸での花見
（平成27年）

■ 姫路藩の産業基盤を整備した榊原忠次

関ヶ原後の慶長 5 (1600) 年姫路に入封し、三重の防御線を有する姫路城を築き城下町を整備したのは池田輝政、船場川に舟運を開くとともに干姫輿入れの化粧料で西の丸を築き、姫路城の総仕上げをしたのが本多忠政、そして新田開発を指揮・奨励するなど姫路藩の産業基盤をつくったのが、徳川四天王のひとり・榊原康政の孫で、慶安 2 (1649) 年 6 月、陸奥白河藩から姫路藩に移封となった榊原忠次 (ただつぐ) といわれています。

忠次は、歴代姫路藩主の中でも名君といわれていて、寛文 5 (1665) 年に 61 歳で死去するまで、約 16 年間姫路藩政を指揮しています。中でも有名なのが万治元 (1658) 年に「升田堤 (ますたつみ)」を築造して西加古川を締め切り、二つに分かれていた加古川の流れを一本化し旧河道を開拓したことです。

■ 横堰を築いて夢前川の流路 (派流) を一本化し、旧河道を開拓する

夢前川は、江戸時代の初めまで上流域と中流域の境である現在の姫路市御立 (みたち) の横関地区辺りで数本の派流に枝分かれし、荒れ川となって南流していました。

「升田堤」築造の 3 年前の明暦元 (1655) 年、このような状況を見た忠次は、姫路城下や周辺の村々の水害を防ぎ広大な氾濫原を開拓する目的で、夢前川の流路の一部に横堰を設けることにより締め切り、流路を一本化する改修工事を行いました。

この改修について『郷土史ふるさと安室』では、『姫路城史』(中巻) からの引用として以下のように記されています。

「明暦元 (1655) 年 (榊原) 忠次は、富塚正顕を奉行として飾西郡 (しきさいぐん) 夢前川を改修した。

この夢前川は古歌にも多く詠まれ、古 (いにしえ) は大河で蛤山 (はまぐりやま)、船越山などを挟み、西は青山から東は今宿まで及んだ。源を鹿谷村^{※1} (かやむら) 雪彦山 (せびつさん) に発し置塩村^{※2} を過ぐるので一に置塩川ともいひ、青山に於いて菅生川を合せた。現にこの時なお主流は御立から今宿に流れていたが、忠次は御立に於いて堰を築き、水流を直接青山に導き、その跡を開拓し水田とした。今に横関の字が残っている。」

『郷土史ふるさと安室』では、「夢前川改修工事は明暦元 (1655) 年に (中略) 着工されましたが、竣工した年月は定かではありません。」としています。ただ、流れのある川を堰き止める工事は短期間で一気に行う必要があります。

因みに「升田堤」による西加古川締め切り工事では 1 か月余りで完成しています。

夢前川は、平常時は穏やかな流れですが、一旦増水すると書写山東麓辺りから奔流が直流し、御立村をはじめとする川下に甚大な被害をもたらすとともに、その跡に広大な野川原 (氾濫原) を形成していました。右の絵図 (図-1) に見られる「田川原」や「ひや川原」、「御館川原」が、いわゆる「野川原」です。

この改修によって、古川 (旧河道) と新川 (新夢前川) の間にできた野川原が通称中川原と呼ばれた所で、この一帯の開拓をめぐる東坂本村と御立村との間に度々争論が起きています。

その争論に関する史料として、延宝 6 (1678) 年の「夢前川野川原榜示取決め絵図」と、作成年不詳ですが、ほぼ同時期に描かれたと思われる 3 枚の絵図があり、これらの絵図には改修前の旧河道が描かれています。

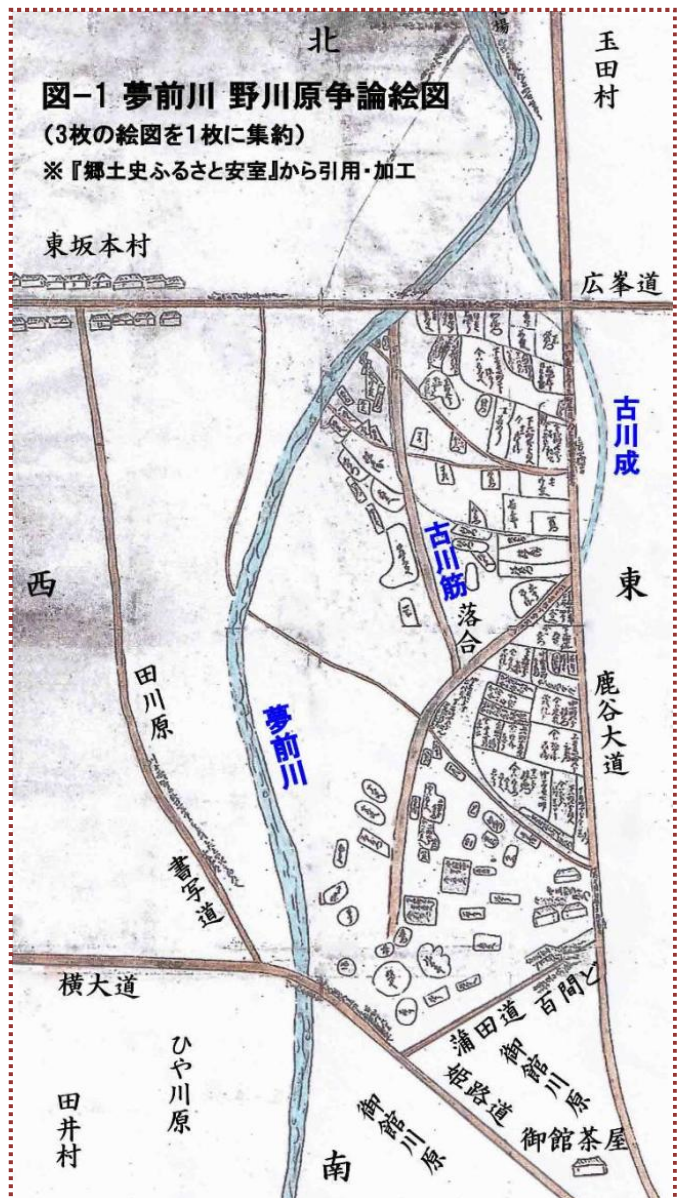


図-1 の絵図中の「古川成」と「古川筋」が旧河道で、この二つの旧河道は「字落合」で合流し、一本の大きな流れとなって更に南流し、夢前川の左支川・水尾川流域に流れ込んでいたようです。

※1 鹿谷村：明治 22（1889）年 4 月 1 日 町村制施行に伴い鹿谷村発足。昭和 30（1955）年 7 月 1 日 置塩村・菅野村と合併し夢前町が発足。同日鹿谷村消滅。

※2 置塩村：明治 22（1889）年 4 月 1 日 町村制施行に伴い糸田村ほか 9 村の区域をもって置塩村発足。昭和 30（1955）年 7 月 1 日 鹿谷村・菅野村と合併し夢前町が発足。同日置塩村消滅。

■ 横堰はどこに築かれたのか

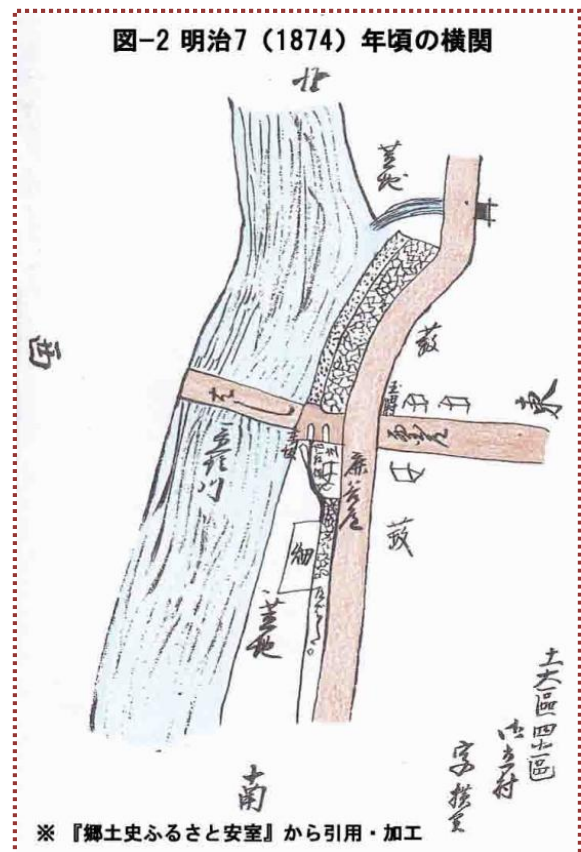
では、横堰はどこに築かれたのでしょうか。明暦期（1655～1658 年）当時の堰は、その後度々の出水で損壊し、その都度補修されてきましたが、残念ながらどこにあったのかわかっていません。

右の絵図（図-2）は、御立元庄屋・置塩家文書の一部で、明治 7（1874）年に描かれた御立村字横関周辺の略絵図です。南北に流れているのが置塩川（夢前川）であり、橋を挟み東西をつなぐ道が西国道です。また、置塩川の東岸を南北方向に鹿谷大道が通っています。この道は、夢前川上流域と姫路城下を結ぶ古くからの主要道であり、西国道は京への上り道として、また書写山への巡礼道として古くから発達していました。

横関が交通の要であると同時に、軍事上も重要な位置にあったといえます。

その鹿谷大道に沿って西国道を挟むように南北に長く石積堤防が描かれていて、これが派流を堰き止めた横堰と思われます。

横堰の築造によって流路の右岸側には大量の土砂が堆積し、書写山系からの谷川水と合わさって広大な扇状地を形成、また左岸は流路を断たれたことにより広大な川原平地が出現しました。この川原平地がその後開拓され、耕作地が生まれました。



■ 「百間ど」を築くことで御館川原の開拓が進む

「百間ど」は、「夢前川流野川原争論絵図」（図-1）に描かれているとおり、鹿谷大道と横大道（姫路道）が交差する辺りの御館川原にあり、洪水防止のために築かれた新堤防（堀切）のことです。明暦 2（1656）年の「夢前川改修絵図」によると、「明暦二年丙申 八月四日に堀切仕（つかまつ）り 此間百十四間」と付記されていて、「百間ど」は、正確には 114 間（≒207m）あったようです。この堤防によって 2 本の旧河道は締め切られ（ここの意味がよくわからない）、その結果として御館川原の開拓が大いに進んだそうです。

この堤防は、明治 22（1889）年の大洪水の際、横大道の北側が決壊しています。榎の大木が一時に倒れ、濁流は上手野から下手野東蔵田へ流下、水下（下流）の各村は全員東側の山へ急ぎ避難したそうです。牛馬を引いて一時の食糧を運び、神社の中に老人、子供を入れて一夜を明かしたとか。その後復旧工事が行われていますが、今はその姿を見ることはできません。

ところで、「百間ど」の「ど」が何を意味するのか気になります。気にしていると不思議なもので、たまたま見ていた『夢前川流域史』に掲載されている「災害年表」に「明治 22 年 8 月 19 日、大風雨堤防破 上手野下手野蒲田全村避難 百間土居決潰」、「明治 25 年 7 月 24 日、豪雨 御立百間土居決潰手野蒲田大洪水」との記述を見つけました。

「土居」は、「土手、堤」を意味するので「長さ百間の土居」つまり「百間土居」と呼んでいたのが転訛して「百間ど」になったと思われます。

■ 横関橋

広峯道を通って書写山に行こうとすれば、御立村字横関の鹿谷大道を横切り、夢前川を渡らなければなりません。明暦 2（1656）年の夢前川改修絵図には「川幅八十二間（≒148m）」と記されています。江戸時代ここに橋はなく、おそらく歩渡り（かちわたり）で通行していたと思われます。

いつ頃この横関の地に橋が架けられたかは不明ですが、明治 4（1871）年 7 月作成の東坂本村絵図（図-3）には横関橋という名の 3 径間の木橋が描かれています。恐らくこの橋が現在の書写橋の位置に架けられた橋と考えられ、4 ヶ所の橋脚の上に、中央がやや高く膨らみをもった橋桁が描かれています。今のところ、この絵図が横関橋の初見だそうです。

右下の絵はがき（写真-5）は、大正 8（1919）年 10 月に架けられた書写橋（木橋）で、前方の山は書写山です。

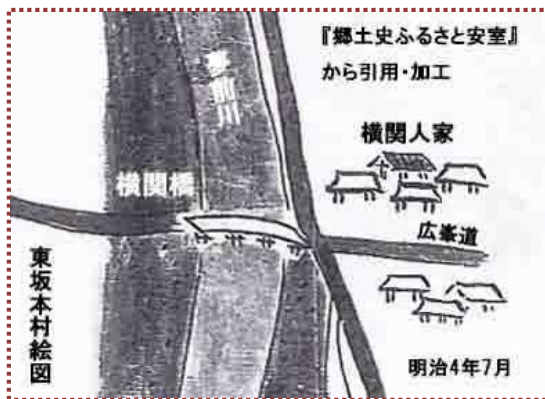


図-3 明治 4（1871）年頃の横関橋



写真-5 絵はがき 書写橋（親柱に大正八年十月架橋とある）

■ 夢前川堰き止めの経験が買われて、御立組は西加古川締切工事にも駆り出される

横堰築造による夢前川流路の一本化は「御入用普請」、つまり藩費による工事とされます。したがって工事に際しては、領民に日当を渡して労役に駆り出したはずですが、

そして、横堰築造から 3 年後の明暦 4（1658）年※3に榊原忠次は「升田堤」築造による西加古川の締切工事を行います。大規模な工事だったことから 8 つの大庄屋組が工事を担当しましたが、夢前川での経験が買われたのか御立組にも動員がかかっています。

明暦 4（1658）年 6 月上旬より工事を始め、7 月上旬までに締切堤防が概成しましたが、洪水によって元の川瀬（川底の浅い所）に戻ってしまいました。

百姓たちは途方に暮れていましたが、忠次は「このまま放置すれば、西の川筋の多くの田畑が自然に砂の川になってしまう。これを

また堰き止めれば、以後は難渋することなく、升田村より米田村の下までの廃川跡を新田開発して耕作に励めば、国家が豊かになる礎となるであろう。入箇（費用）のことは気にかけず人足を倍に増やしても急いで堰き止めるよう」命じ、7 月中旬より工事を再開、町場に住む者には松明（たいまつ）をつくらせて昼夜兼行で工事に当たらせた結果、8 月下旬に締切工事は完成したそうです。



図-4 加古川瀬違え図（『高砂市史・第二巻』より引用・加工）

ただ、工事が行われた明暦 4 (1658) 年 6 月上旬～万治元 (1658) 年 8 月下旬は、今の暦でいうと、7 月上旬から 9 月中旬になります。日当がもらえるといっても出水期に、しかもくそ暑い時期に河川を締め切る工事はきつくて、加えて農繁期に駆り出されたのではたまったものではありません。姫路藩は年貢率を引き下げて百姓たちの頑張りに報いたそうですが、稲の収穫はできたのでしょうか。

※3 明暦 4 (1658) 年：明暦 3 (1657) 年に起きた明暦の大火などの災異のため、明暦 4 年 7 月 23 日に「万治」に改元している。

■ モノローグ

右下の写真-6 は、姫路市書写地先の夢前川河川敷で 4 月初旬に撮影したホオジロです。もちろん、撮影時は鳥の名もわからず帰って調べてわかったのですが、この鳥の鳴き声の「聞きなし」(鳥や動物の鳴き声を人の言葉や文字に置き換えて覚えやすくしたもの)として「一筆啓上仕候」(いっぴつけいじょうつかまつりそうろう)や「源平つつじ白つつじ」などが知られているそうです。知っていたら、もう少しじっくり鳴き声を聞いていたものを。

ホオジロ (頬白)

ホオジロ科ホオジロ属に分類され、東アジアに広く分布し、顔の模様とさえずりが特徴的な小鳥である。日本では種子島、屋久島から北海道まで分布する。基本的に長距離の渡りはせず、本州以南では留鳥である。成鳥は全長 17 cm ほどでスズメとほぼ同じ大きさだが、尾羽が長い分だけ大きくみえる。成鳥の顔は喉・頬・肩斑が白く目立ち、「頬白」の和名はここに由来する。平地や丘陵地の森林周辺、農耕地、草原、荒地、果樹園、河原など明るく開けた場所に生息する。主に地上や樹上で活動し、草の茂みに潜むことがある。単独または数羽ほどの小さな群れで行動する。食性は雑食性で、繁殖期には昆虫類、秋から冬には植物の種子を食べる。



写真-6 ホオジロ

【参考資料】

- 1 『郷土史ふるさと安室』 郷土史ふるさと安室編集委員会編 平成 17 年 12 月
- 2 『夢前川流域における景観形成過程 — 治水事業と地域資源に着目して—』 加茂祐樹
兵庫教育大学地理学・地理教育研究室研究報告 26 令和 3 年 4 月
- 3 『夢前川流域史』 吉田俊三 昭和 49 年 2 月
- 4 『広辞林 第五版』 三省堂編修所編 昭和 48 年 4 月
- 5 『高砂市史～第二巻 通史編(近世)』 高砂市史編さん専門委員会編 平成 22 年 6 月
- 6 『榎原忠次、鹿谷村、置塩村、万治、ホオジロ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：令和 6 (2024) 年 9 月 『ひょうご水百景』 No.204

改訂：令和 8 (2026) 年 8 月 『ひょうご水百景』 No.204